ここのえまち 九重町 総括会議

ハピカム ミライデザイン会議

大分合同新聞社が、次代を担う若手リーダーと一緒に地域の未来を考えるミライデザイン会議「ハピカム」九重町編が６月30日、同町の九重文化センターで行われた。「農林畜産」「観光」「環境」の３分科会の議論を経て行われた総括会議では、分科会で出された地域の課題をさらに深く話し合った。九重町の基幹産業である農業を元気にするためには観光が元気になることが大切だという提言から、両分野の連携方法を探り、さらに、環境分野も含めた町全体が連携してのＰＲへと議論が発展した。その中では、銀座の大分県アンテナショップ坐来（ざらい）大分で九重町産品フェアを開き、観光や自然も併せてＰＲすることや、豊後中村駅を情報発信拠点にすること、地域のハブとしての博物館などが提案された。若手リーダーからは九重の一体感を高めるため、自分たちの世代が積極的に“つながり”を深めていくことを誓い合った。古里の明るい未来をつくるため、若手の連携の芽が生まれた。

■ウェブ　http://www.oita-press.co.jp
■スマートフォン　http://www.oita-press.co.jp/h-come/

主催／大分合同新聞社　共催／九重町　九重町商工会
協賛／国立大学法人 大分大学　㈱大分銀行　㈱NTTドコモ九州支社大分支店　日本たばこ産業㈱熊本支店　東洋インキ九州㈱

「農林畜産」分科会まとめ

畜産、トマト、ブルーベリーの生産者、役場の担当者、アドバイザーのＪＲ九州ファームの方を交え話をした。「夢」をテーマとしたが、それだけではなくマイナスも話そうという意見が出され、課題から話し合った。課題は大きく後継者の不足、九重町としての産地形成の弱さ、遊休地の活用、販路の問題。まず、販路については地産地消と町外への販売の２点があるが、地産地消面では旅館など観光面との連携ができないか、農家と旅館のそれぞれの立場があり、それを調整する行政の取り組みなどが紹介された。地域で売っていく方法として、ＪＲの駅で販売できないか、野菜を列車内で売れないか、豊後中村の駅名を九重に変えることでアピールできないかなどの意見が出された。町外については福岡ビジネス協議会との連携の動きが出ているので観光分野とも力を合わせて販路拡大に結び付ける、もしくは福岡の需要を取り込んでいくなどの提案が出た。後継者問題は遊休地の解消とも関わるが、やっていておもしろくない農業ではなく、後につながっていくために何かできないかという話になった。だが、現実的には人口も減っているので、外から新しい力が必要であり、ＪＲなど企業の誘致で土地活用を考えていくべきだとの意見が出された。ＪＲやバスを活用して福岡からどう観光客を呼ぶか、温泉観光地に宿泊してもらって野菜や果樹の収穫体験ツアーができないかなど、農業と観光をどうリンクさせるかという新しい課題も見えた。

「観光」分科会まとめ

観光分科会の報告は主に３点。地域資源を見つめ直し、生かそうということ、ニーズに合った情報発信を考えていこうということ、町の全体的な連携を深めていくこと。観光素材として温泉と登山という有名なものがあるが、登山客へのＰＲをもっと考えた方がいいのでは、と指摘があった。新しいパンフレットを作ることや旅館から登山客への案内、新しい場所でのＰＲなど提案があった。野上にはＪＲの駅と高速道路のインターチェンジという素材がある。この二つを九重の観光のスタート地点として生かす方法があるのではないか。また、東飯田には遺跡や平家の落人伝説などがある。それぞれの地域の素材をもう一度見つめ直して、生かすことが必要だと指摘された。新しいパンフレット発行に加え、メールマガジンの発行や、東京・銀座のアンテナショップ坐来（ざらい）大分で商品開発をして、付加価値を付けＰＲするなど、ニーズに合った情報発信を考えていきたいとの話があった。これらの取り組みを個々やそれぞれの場所単位ではなく、九重町全体としての発想、何をやるのでも「九重町」を頭に付け、個別ではなく町全体をPRし、九重町全体の認知度を上げた方が良いのではないか。しかし、全体がまとまって連携を取ることは難しい。特に組織としては難しい面があるので、個人的付き合いからでも連携を深めていこう、「やりましょう」ではなく「やります。一緒にやりませんか」の話から少しずつ連携を広げていきたいと、提案された。

「環境」分科会まとめ

まず、自然保全を取り上げた。なにが自然保全の課題であるかというと外来種が問題になっている。人の手によって駆除してもいたちごっこで、きりがない状況が続いている。こういう状況を関心がない人にも知ってもらうために、いろいろアピールしていくことが必要。そのためにそれぞれ活動しているが、その中でトキが住める里山づくりが話題になった。ただ、トキはあくまでもシンボル。地域の中から今あるお宝を探し出すことの重要性を議論した。九重にしかないもの、例えばラムサール条約に登録されているタデ原の湿原や、八丁原の地熱発電所などを見つめ直そうと指摘された。関心がない人にどうやってアピールするかということでは、教育や周知のための広報の重要性も課題になった。そのためには、自然観察会や地熱発電所の見学などを有機的につないでいく方法があれば、認知度がアップするのではと提案された。九重町に素材としてある自然環境は最高に誇れるものだ。それらをつなぐハブとなる施設、組織が必要なのでは、という話になった。その中で、アドバイザーの永野先生（大分大学教育福祉科学部講師）から地域づくりの拠点としての博物館があればどうか、とアドバイスされた。博物館は、地域づくりももちろんだが、学術的助言もでき、子どもらの教育の場にもなる。自然に関心を持ってもらうためには川の上流域と下流域がお互いの暮らしを意識する視点で生活していくことが大事なのではないかとなった。

四つの地域 和して競え

創り出すぞ！九重“夢”物語

素敵な駅名に変える

佐々木　総括会議では分科会で出た話を基に、どういう形で発展させていけるのか話し合いたいと思います。キーワードとしては素晴らしい素材がたくさんあるということ。素晴らしい自然がたくさんあるのは、誰もが認めることだと思います。また、“つなぐ”と言う言葉が分科会報告で出されましたが、産業や分科会の枠組みを越えてやれそうなことがたくさんあるのではないでしょうか。各分科会の代表の皆さん、自己紹介を兼ねて他の分科会で気になったことを挙げてください。

鷲頭　eagle farm３代目の鷲頭将治と申します。皆さんとの交流や、意見交換をすることで自分自身が成長したいと思い参加しました。農林畜産分科会の中で観光という大きいテーマが出たので深く掘り下げたいと思います。また、農業を語る上で、自然と共存するということは避けて通れません。その中でいかに環境と両立するかという点にも興味があります。

関屋　宝泉寺温泉ホテル龍泉閣おかみの関屋典子と申します。お話を聞くと両方の分科会で観光ということがテーマとして上がってきたと思うんですが、（農林畜産、観光、環境の）三つの分野がきちんとつながったらいいなと思いました。宝泉寺では珍しい昆虫をよく見かけるんですよ。「九重の大自然にはこのようにいろんな虫がいます」と紹介できる場所ができたらと思います。

種村　長者原ビジターセンターで働いています種村英大といいます。「つなぐ」ということが一つのキーワードとしてあったので、つなぐ具体的糸口が見つけられたらいいな、と思います。

佐々木　岩豪さん、分科会傍聴して感想をお願いします。

岩豪　農林畜産分科会では駅弁を作ったり、列車内で売ったりの話や、また、温泉から高原バスで摘み取り体験をしての宿泊コースはなぜなかったのか不思議なくらい。ベリージュファームで食べたブルーベリーのおいしさをみんなに知ってほしいと思いますし、筋肉質のトマトはぜひ食べてみたいです。観光では、ここに来る前に寄ったＪＲ豊後中村駅はロマンチックな駅です。生かさないともったいないなと。素敵な駅名に変わったらいいなとも思います。環境分科会では民俗的なことや風習など残していかないといけないと思いますし、博物館は本当に必要です。九重独自の座敷わらしなどがいるのではと期待しています。全体として今あるお宝を探すということで感銘を受けました。

佐々木　農林畜産分科会で、最初に課題を出してその先の道筋を見ていきたいという話でしたが、分科会で課題が見えましたか。

鷲頭　課題は、農業者人口が非常に減っているということがあります。2010年までの25年で半分以下になっています。その中でも60歳以上の割合が60％を超え超高齢化していますし、60歳を超えている人が20年後農業をしているかというとしていないと思います。観光と連携するにしても観光側から提案されたことを実現する人材がいない、生産量が足りないという状況がすぐ来てしまいます。

佐々木　その改善の部分は全国的な問題だと思いますが、若い人同士でつながっていけたら、解決への糸口がつかめたりしませんか。

鷲頭　九重町では農家の数が減ると人口が減ってしまう状況にあります。それを解決するため企業参入を歓迎する部分もあると思います。ただ、企業にいいところばかりを持っていかれないように、個々の生産者が強くあるということが大前提です。その中で企業と一緒にやっていくことには本当に可能性があると思います。九重の農業の魅力はたくさんあります。一つに野上、南山田、飯田の気候の差を使ったものがあります。また、周年的なことを考える必要があるのではと思います。

少ない全体での活動

佐々木　関屋さんにお聞きします。九重九湯と呼んでいたのを、現在は12湯で九重“夢”温泉郷として売り出していますが、九重でまとまってのPRは難しい部分があるということですが。

関屋　分科会で九重ブランドの話をしました。九重の知名度が低い中で、もっと低い宝泉寺だけで宣伝に行ってもあまり効果がありません。やはり「九重に宝泉寺温泉あり」という売り出し方をしたいです。いつも四つの地域で分かれているという話も出ましたが、その四つの地域をつなぐのは九重“夢”温泉郷として町全体で売り出していくことが一つの方法だと思います。

佐々木　そういう動きはないのですか。

関屋　あまりないと思います。やはり温泉地ごとの売り方が多いです。もっと九重“夢”温泉郷としてのPR活動を増やした方がいいと思います。

佐々木　“夢”温泉郷も含め九重には自然がたくさんあるな、地球を意識する場所が多いなと思います。種村さんは神奈川県出身ということで外の目から見て感じることはありますか。

種村　初めて九重町に来たのは、飯田のある農家がきっかけです。私自身農業がしたいと思って農業体験に来たのではなく、日本人の暮らしについてのふとした疑問から九重に来ました。それ以前に海外を回る中で、「日本ってどういうところ」という質問に答えられなかったのです。九重は暮らしの文化が見えるところです。来てすぐに、草原景観を守るため地域の人が集まっての野焼きがあり、かやぶき屋根があり、日本の暮らしの文化が目に見える。また、そのことに地域の人がたくさん関わっている、面白いところだと思いました。

なぜ使ってくれない

佐々木　総括会議では、各分科会の話をつなげたいと思いますが、分科会で地産地消という話が出ていました。100軒ほどある旅館と農業とのつながりの現状について鷲頭さんと関屋さん教えてください。

関屋　仕入れのコスト面の話が出ました。もっと安く仕入れができる方法はないんでしょうか。

鷲頭　観光が元気になると農業が元気になるという意見が出ました。その中で、地元の旅館で使ってほしいというのは農業者に共通の思いです。なぜ使ってくれないんだろうということを考えると、ロットやコストの課題があると。農業者と旅館お互いが歩み寄る価格帯が絶対あると思うんですね。ここだったら生活が成り立つ、ここだったら旅館が成り立つの線が。さらに、そこに付加価値を付けるとして、地元産のニーズはどのくらいあるのですか。

関屋　その前に、旅館と農業者が直接というのは難しいと思います。商品を探したり、ほしいときにすぐ仕入れられるシステムが必要です。その間に入ってシステムを動かす人は誰なのかと思うんですよ。そこがはっきりしてから、ニーズなどの話ができるのでは。

観光／若手リーダー
Noriko Sekiya
関屋典子 さん
玖珠町出身、33歳。宝泉寺温泉おかみの会、ホテル龍泉閣おかみ。26歳でおかみとなり、２児を育てながら宝泉寺温泉を盛り上げている。

鷲頭　その話も出ました。農林畜産分科会アドバイザーの森勝之さん（JR九州ファーム大分代表取締役社長）によると、JRでは地産地消のコーディネーターが流通させ販売している。間に入る人が何軒かの農家を統括してくれれば、量の調整ができます。そういう任意団体をつくらないと、という話が出たんですが、任意団体を新たに立ち上げるのは非常に難しいので、できれば既存の農協さんなどがやっていただければ、という話になりました。農協が対応してくれたら心強いと思ってます。

関屋　農協さんなどが間に入ってもらって、旅館に泊まったら地元のおいしいものを食せるというスタイルが理想ですので、それを目指していきたいと思います。

ブルーベリー街道に

佐々木　ちなみに今旅館で出せる食材は。

関屋　お肉は外せません。豊後牛と九重“夢”ポークはお出ししているんですが、それ以外ではトマトと白ネギ、白菜、キャベツ…四季折々の旬のものをお出ししたいし、九重米を町内の旅館が全部使えるような取り組みができたらいいです。

佐々木　思いは一致しているので、間に入るのがどこなのか。ぜひ、考えていけたらいいなと思います。もう一点、ブルーベリーが西日本一の作付面積を誇っているが、産品がうまく回っていないのではないか、と指摘がありました。商工会青年部からはブルーベリーサイダーを作りたいという話が出ていましたが、そこでも価格の問題がありましたし、一方で冷凍庫で眠っているものもある。このミスマッチはなぜでしょう。ブルーベリーも作っている鷲頭さん、いかがでしょうか。

鷲頭　分科会で出たのですが、収穫時季には九重町の全旅館がブルーベリーデザートを出すなどの取り組みをやっていただけると、農業者として「みんなやっているいい取り組みだ」と受け止められるし、ブルーベリーに価値があると思ってくれる生産者も増えるのではないかと思います。

佐々木　現在のブルーベリーの使い方はどうなんですか。旅館ではどうですか。

関屋　現状ではベリージュファームさんなどの摘み取り体験を案内するだけで、お菓子などには使っていないんですが、お話を聞いてぜひ使いたいと思いました。

鷲頭　ぜひ使ってください。個別に、誰々さんはどこ、誰々さんはどこという取引だけではなく、町全体でどういう取り組みをしているかが大事だと思います。そば街道ではないですが、収穫期の２カ月間はブルーベリー街道のように、どこに行ってもブルーベリーソフトクリームが食べられるとか、デザートはブルーベリーアイスクリームだとか。商品開発をして売り出すので、農業者にこのくらいの生産量をお願いします、というように同じテーブルで考えていくともっとスムーズに進んでいくのではと思います。

農林畜産／若手リーダー
Shoji Washizu
鷲頭将治 さん
九重町出身、36歳。飯田高原で牧場「eagle farm」を営む３代目。畜産業を軸に、稲作、ブルーベリー農園、農家レストランを展開している。

関屋　ただ、するのは簡単なんですが、PRという部分がテーマになってくると思うんですよ。今までは観光がPR不足だと言われてきたんですが、農家の方もPRを一緒にできるようにした方がいいと思うんです。どう考えていますか。

鷲頭　同じように思います。ただ、農家は生産とか販売とかＰＲを単独でできる人は少ないです。ＰＲをするときに生産者が行って「私たちが作っています」と言うことは安全安心が求められている中で非常に説得力がありますが、ＰＲが苦手な農業者もたくさんいると思うので、そこはプロのコーディネーターやアドバイザーの力も借りながら、行政も絡んでいただいてみんなでやっていければいいと思います。

遠野物語並みの資源

関屋　九重町があまりメジャーではない中で、新しいことをしても、情報発信を間違っていたり伝わらなかったりしたら、結局知られずに終わる。いつも通り流れてしまう。今までも良いことをたくさんしてきたはずなんですけど、知られずに終わってしまったというのが繰り返されていると思うんですよ。どういう情報発信をしたら九重が知れ渡ると思いますか。

鷲頭　キーワードは少量多品目で付加価値が付いた農業を目指すのか、薄利多売で大型化する農業を目指すのかの二つです。農林畜産分科会アドバイザーの森さんから九重は大量に物を売るのには適さないのでは、と指摘されました。逆に九重に来ないと食べられないなど、九重で全部物語を終えてしまうものをつくって、加工して、販売することができる産地だ、ということに僕らが気付いて取り組むことが必要じゃないかと思います。岩豪さんは開会式のあいさつでの妖怪の話など観点が豊かです。分科会で出た「実は大友宗麟がブルーベリーを食べていた」のような物語を創作してもらうなど、おもしろくて新しい切り口があるのでは、と思います。

佐々木　その物語については、私も期待しているんですけど。

岩豪　大友宗麟がブルーベリーを食べたかどうかは…。

鷲頭　それは例えということで。

岩豪　大友宗麟は南蛮文化と密接につながっていて、トマトは食べたかなど調べてみる価値はあります。九重独自の豊かなものがあると思います。ちょっと見ただけでお宝がいっぱい埋まっていると感じました。そういうストーリーづくりがあればいいと思います。九重には、柳田国男の遠野物語に匹敵する豊かな地域資源があるんじゃないかと。そういう物語づくりには協力していきたいです。

旅館で伝統食を提供

佐々木　種村さんが九重の良さを一番実感していると思います。暮らしや伝承などで見つけたおもしろいものはありませんか。

種村　全国の田舎はどこでも、ぱっと見たときは一緒だと思います。文化の違いをつくるのはさまざまな自然条件。谷筋であったり、山間地だとか標高などで。そういう意味で自然が暮らしと切り離されたものではなく、私たちは自然の中で暮らしてきました。その暮らしの伝承や文化を文献などで探すことで食べ物についても何か（伝承が）見つかるのではないかと。それを旅館で取り入れて、伝統食を出すなどしたら、分野は違いますが自然を中心としたつながりができるのでは、と思います。

環境／若手リーダー
Eidai Tanemura
種村英大 さん
神奈川県出身、30歳。長者原ビジターセンター自然解説員。2007年から九重在住。昨年、地域での環境教育活動が評価され県教育奨励賞を受賞した。

佐々木　九重の観光客は約500万人を超えていて、別府に次いで県内で２番目に多い。大半は自然に触れたいと思って来ていると思います。環境の視点から見て、農業・観光にアドバイスは。

種村　都会の人間としてどこに滞在したいか考えたとき、温泉に入って、ご飯を食べられる場所はたくさんあって、関東から九州に温泉だけ入りに来ないと思います。文化や日本の暮らしに興味のある人の行き場があまりないので、他の場所と差別化を図りたいと思えば、そういうコアな層に訴えてはどうか。田舎暮らしを望む人も農業や自然の中の知恵に憧れる部分があるので、そういう人に訴えるものがあれば楽しいかなと思います。

朝日長者基に野外能

佐々木　ターゲットをどこに置くかになりますが、大阪や東京などでいいＰＲができれば、九重物語を巡る旅などできるのではと思います。川端康成が昭和27年に九重を訪れ、書くつもりがなかったのに、美しい自然に感動し小説を書いています。「飯田高原は紫がかって見える」とも書いています。紫の高原、紫のブルーベリー、小説がつながっていいストーリーになるのでは。そういう物語づくりで変わる部分があるのではと思います。分科会の話を聞いて分野ごとのつながりが大切だと感じました。活動の連携ということで、おかみの会の取り組みを教えてください。

総合コーディネーター
Minoru Sasaki
佐々木稔
1991年大分合同新聞入社。社会部、中津・東京両支社、戦略室などを経て地域報道部長。45歳。もっととんがってまちづくりをしましょう！

関屋　銀座にある県のアンテナショップ坐来（ざらい）大分の料理長が日田の出身なので、九重の食材でフェアができたら、「銀座に九重あり」というメッセージを発信できて話題になり、食と観光、自然がつながるのではと思います。

鷲頭　おもしろいと思います。今日の僕のテーマは「理想論を語るだけじゃなく、今日何か一つでも決める。形を残す」ということです。「銀座に九重あり」のPRの仕方で、世界のタデ原や温泉郷や豊かな食材をアピールすることは可能だと思いますし、ぜひやりたいです。

種村　アンテナショップを使ってPRするのは楽しいと思います。

佐々木　岩豪さん、飯田高原など雄大な自然を利用してやれそうなことがあるのではないでしょうか。

岩豪　朝日長者の伝説を生かして雄大な自然の中で野外劇や野外能などがいいのでは。新作能を創って日本の伝統芸能の一つとしてやる価値があると思います。また、九重と関係のある文学者川端康成と檀一雄を生かして、子どもの作文コンクールをつくるとかもいいのでは、と思います。ノーベル文学賞作家が飯田高原の自然を認めてくれたことは、子どもたちの教育に生かせるし、作文を書くことで、書く楽しみを培ってほしいです。

総合アドバイザー
Yukiko Iwago
岩豪友樹子 さん
愛知県出身。日本演劇協会会員、歌舞伎・劇作家。大分市在住。代表作は国立劇場で上演された歌舞伎「江戸宵闇妖鉤爪（えどのやみあやしのかぎづめ）」。

知名度不足を逆手に

佐々木　川端康成の文学碑などもっと活用方法があるのではないかと感じます。観光にはいろいろな切り口があると思うんですが、九重観光の可能性について観光分科会アドバイザーの六本木武史さん（阪急交通社大分支店営業係長）にお聞きしたいと思います。

六本木　地元の人が気付いていない、いいものがいっぱいある。生かし切れていなかったという話も出ました。今、観光の方向性は極端に高いツアーと極端に安いツアーと両極端になっています。ブルーベリーの作付面積が西日本一など、豊富な自然や食材など生かせば、価値の高い観光の可能性を秘めていると思いました。

佐々木　その場合のターゲットは。

六本木　ブルーベリーだと九州・山口・四国。“夢”温泉郷だと、関東・関西圏では別府や由布院に行ったことのある人が多いので「２度目の九州旅行は九重に」などの切り口で、知名度が不十分なことを逆手に取るやり方もあると思います。

佐々木　農業の後継者の問題ですが、若い人は帰ってこないのか、いないのかどちらですか。

鷲頭　新規やＵターンは圧倒的に少ないです。収入を安定させることが第一だと思います。生活できる環境をつくるために兼業農家でのワークシェアリングや農業ヘルパーのような仕組みをつくれば帰ってくる人がいると思います。

佐々木　九重で帰ってこなかったら、他では帰ってこないだろうといえるぐらいの魅力があると思います。農林畜産分科会の佐藤進太郎さん（トマト生産農家）にお聞きします。地域の若い人と一緒にやりたいという話をしていましたが。

佐藤　親が農家だが、後を継いでいない若い人などに、休耕田で有機米を作ってみないかという話をしています。有機米は高く売れるので、いずれ生産組合などができればと思い、そういう取り組みを始めています。

佐々木　九重の場合、佐藤さんのようにおもしろい農業をしている人に付いていくみたいな取り組みがとてもいいなと思います。今回別のテーマとして、一町三村が合併した九重の四つの地区の話があります。外から見ていると、九重は合併せずに自主独立の道を歩んでいていいな、というように思っていたのですが、中に入ってみると、連携して何かやるときの足かせになっている部分があるのでは。

別の地区からも応援

関屋　私たちの世代から変えていかないと、と思ってます。何かお祭りをするにしても、玖珠町はみんなで集まってやっているんですが、九重はそれぞれに分かれてしまっていてちょっと寂しいです。近く野上祇園があります。それぞれの地域からエールを送ることで九重町が一つになり、活性化につながると思います。

佐々木　野上祇園の話が出ましたが、観光分科会の高橋憲治さん（野上祇園実行委員）いかがですか。

高橋　野上祇園に宝泉寺温泉おかみの会、飯田から青年団、べべんこも出店し、またいろんな地区に声を掛けて町全体の祇園にしたいと頑張ってます。イベントを通して、なるべく４地区の垣根をなくそうと思っています。

佐々木　分科会の中で、エントランスとしての野上地区という役割の話が出ました。JRの駅を町が買うという全国でも例のない取り組みがあり、かやぶきの非常に珍しい駅舎もあります。例えば、九重“夢”高原駅などの駅名に変えてはいかがでしょうか。

森　名前を変えるのは非常に力が要ります。切符は全国で販売していますので、全国のシステムを変えないといけないということになります。ただ、地域が盛り上がればそれを動かす原動力になると思います。駅の活用法ということでは、分科会でも出ましたが、SL人吉の一勝地駅では列車が10分間停車して地元産品を買えます。とても人気があります。駅のホームで何か売るなど面白い考えだと思います。

佐々木　四つの地域が足かせになるのではなく、いい意味で競い合うようになれば、と思います。最後にお一人ずつ、今後町をこう変えていきたいなどの決意表明をお願いします。

種村　４地区の話と、また分科会でも自然＝飯田のイメージがあるという話がありましたが、私はそれではいけないと思います。自然は暮らしの中にあるもので、昔は九重町全体が野原でつながっていたと思います。九重全体の自然を感じてもらうために、文化という切り口でやっていけたらいいなと思います。

駅の利用方法考える

関屋　お話をさせていただいて、豊後中村駅の利用法についてもっと真剣に考えるべきだと感じました。野上は４地区の中でも一番主だった場所にあって、それを生かせていないのは観光の面でも大きいと思います。駅をもっと利用できるように、分科会で出た駅内の観光案内所をつくって、農業、自然、観光を発信できる素敵な場所になったらいいなと思います。

鷲頭　PRが不足しているという話があったので九重のCMをつくってみては、と思いました。最近、JR九州新幹線開業のCMで沿線の人が手を振るCMにすごく感動したんですよ。飯田には線路がないんで、九重町をヘリで回って町民に手を振ってもらったらどうでしょう。夢ですけど、何かおもしろいことをやっているぞ、と感じてもらえれば、何ものにも代えがたいPRになると思います。自分が目指すのは子どもたちに残せる町づくり。キーワードとして「文化」が出たので、文化を伝えていきたいし、農業者としては食の教育も行い、農業に携わっていく人が増える町づくりをしたいです。

岩豪　素晴らしい話をたくさん聞かせていただき感動しています。課題もたくさんあると思いますが、これを機会に議論を重ねてほしいと思います。まず町民が一つにまとまって始めることもいいし、他にもいろんな可能性がありますので、ぜひこれからも交流を深めていってほしいと思います。

佐々木　もともと九重町は元気のある人がたくさんいるという印象でした。今日の話で若い皆さんにもそのDNAが受け継がれていると思いました。各分野でベクトルのとんがった皆さんが、とんがった点と点をつなげたとき大きな円ができます。何もない何もないと言うが、何もないところに年間500万人も観光客は来ません。誇れるものがたくさんありますし、合併をしなかったことで、地域が地域の良さを持ったまま残っていく可能性を秘めています。今回、若い皆さんが集まっていろんな話をしたということがきっかけになって、これからもしっかりと意見交換できる関係であってほしいと思います。ありがとうございました。

大分を学ぶ

九重町編　八丁原地熱発電所

注目される再生可能エネルギー 最前線で得た“気づき”

地元の大学生として大分のことをもっと学びたい─。地域拠点大学として、研究成果の地域社会への還元を積極的に進める大分大学。教育福祉科学部の学生６人が、九重町の九州電力八丁原発電所を訪れ、地熱発電とエネルギーの未来について考えた。

東日本大震災以降高まる節電意識と注目される再生可能エネルギー。地熱発電とは、どのように発電しているのか？再生可能エネルギーには広げていくための課題もあると聞くが、地熱にはどんな課題があるのか？　二つの問題意識を持って九重町に向かった。

到着した同発電所展示館では九重町紹介のビデオと発電所紹介のビデオを見た後、種場俊朗店長から発電の仕組みや歴史、発電規模など詳しく説明を受けた。地熱発電は天候に左右されずに発電できることやCO_2を排出せずクリーンであること、蒸気の循環により半永久的に利用できる資源であることなどメリットと、開発候補地が温泉街の近くに多く、地元との調整が必要であり設置・運転まで時間がかかることなどのデメリットもあるという。説明の終了後、発電施設の見学へ。実物のタービンの大きさや冷却装置の“水のカーテン”は迫力たっぷりで驚いた。

約１時間半の発電所見学を終えて、地熱発電について知識を深めることができた。同時に地元にある地熱発電をもっと多くの人に知ってほしいと考えた。また、より温度の低いバイナリー発電というものがあること、東日本と西日本の周波数が違うので電力の融通が難しいこと、この問題はすぐに解決ができないということも分かった。

再生可能エネルギーの最前線を体感、単なるブームとしてのエコ意識にとどまらず、地域の将来、日本の将来のため必要なエネルギーについて考える新たな“気づき”を得た。

【参加者】
3年　末松直純　松下菜摘
2年　阿部しおり
1年　佐藤由依　古澤奏人　神田祐樹

国立大学法人 大分大学
OITA UNIVERSITY
www.oita-u.ac.jp
□旦野原キャンパス
〒870-1192　大分県大分市大字旦野原700番地
□挾間キャンパス
〒879-5593　大分県由布市挾間町医大ヶ丘1丁目1番地